

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 根岸雅史

学位申請者 周 育佳

論文名 「Effects of computer delivery mode on testing second language speaking: The case of monologic tasks」

結論

周氏から提出された博士学位請求論文「Effects of computer delivery mode on testing second language speaking: The case of monologic tasks」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は全員一致して博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は、根岸雅史を主査に、副査として、高島英幸教授、投野由起夫准教授、中浜優子准教授、海野多枝准教授を加えた5名で構成された。

論文の概要

本論文は、モノログ型タスクにおける受験者のパフォーマンスは、パソコンと対面の各提示モードにより異なるのか、また、二つの提示モードに対する受験者の

態度はどのように異なるのかを調査することにより、パソコンによる第二言語スピーキング・テストの妥当性を検証したものである。

本論文は、全5章で構成される。第1章では、本研究の研究背景、目的、意義を論じている。近年大規模なスピーキング・テストにおいてパソコンの使用が増加しているため、このタイプのテストの妥当性の検証が必要であると、そのため、パソコンと対面式という提示モードにおける受験者のパフォーマンス及び受験者態度の違いの有無を検証することが必要であるとしている。

第2章では、関連先行研究を概観している。提示モードによって分類されるスピーキングの測定方法のレビューの結果、パソコン式スピーキング・テストはコスト面と実施しやすさなどのメリットから、近年大規模スピーキング・テストでよく使われるようになったとしている。このパソコン式スピーキング・テストの妥当性を検証する際には、様々な要因の中でもパソコンの提示モードの影響が特に重要であるとの立場に立っている。関連先行研究の結果から、テープによるスピーキング・テストと対面式スピーキング・テストとでは、スコアの相関が高く、またスコア自体に有意差はないが、両テストの因子構造は異なるということが分かった。発話の言語特徴については、認知モデルと聞き手の傾向についての研究から、人に向かって話す際は、話す相手のいない状況と比べて、学習者の発話はより流暢である一方、正確さと複雑さを犠牲にするとされている。また、受験者の能力レベルにより提示モードの影響が異なるとの指摘もある。受験者のパソコン式スピーキング・テストへの態度を調べた研究からは、受験者がパソコン式スピーキング・テストに肯

定的な態度を示した一方、対面式をより評価していることが分かっている。ただし、これらの先行研究は、サンプル数が少なく、比較されたテストが異なるタスク・タイプやタスク内容を含んでいるといった問題があるだけでなく、テープによるテストを検証したもので、パソコン式テストを検証したものではなかった。そこで、これを明らかにするために、モノログ型タスクに焦点を当てて、対面式とパソコン式のテストの違いを検証する必要があるとしている。

リサーチ・クエスチョン(RQ)は、いずれも、日本人学習者を対象とした場合のモノログ型タスクにおけるパソコン式スピーキング・テストと対面式スピーキング・テストの比較に関するもので、「RQ1. テスト・スコアの差の有無」、「RQ2. 因子構造の違い」、「RQ3. 発話の流暢さ、正確さ、複雑さの違いの有無」、「RQ4. 発話の流暢さ、正確さ、複雑さと受験者レベルとの間の交互作用の有無」、「RQ5. それぞれのテストに対する受験者の態度の違い」となっている。

第3章は、本研究の実施の詳細とデータの分析方法に関する記述である。本研究の参加者は96名の日本人英語学習者で、パソコンによる二つのモノログ型タスクおよび対面式による同じ内容でのモノログ型タスクをカウンターバランス法により実施した。また、テスト終了後、受験者に対して、テストへの態度に関するアンケートも実施した。96名の参加者のうちの79の有効データが、文法、語彙、流暢さ、発音の採点項目について分析的尺度を用いて採点された。さらに、すべての発話は書き起こされ、流暢さ、正確さ、複雑さの指標を計算できるようにコード化された。

第4章では、本研究の結果を報告している。まず、テスト・スコアにおいて、提示モードによる影響は見られず、二つのテストが測定する能力の因子構造は、似たパターンを示した。このことから、テスト・スコアは、提示モードによる影響がないと判断している。しかし、受験者発話を分散分析で分析したところ、繰り返しは対面式に多く、ポーズはパソコン式に多いことから、提示モードによる流ちょうさには質的違いがあることがわかった。また、受験者の英語レベルと提示モードの交互作用は見られなかった。アンケート結果からは、パソコン式と対面式テストの両方への受験者態度は、おおむね肯定的であるものの、*t*検定とカイ二乗検定の結果から、受験者は、対面式をより好むことが分かった。対面式テストは、より楽しく、よりよく受験者の英語力を反映していると思われている一方、パソコン式テストは、受験者が対面式テストほど緊張しなかったことが分かった。

第5章は、考察と結論である。テスト・スコアに有意差がなかったことは先行研究の結果と一致しているが、そのパフォーマンスの差は、採点者が本研究に使われた採点基準により弁別できるほど大きいものではなかったという可能性を示唆している。また、因子構造に違いがなかったことと両テストにおいて語彙密度が高かったことから、両テストはモノログ型能力を測っていると判断している。対面式テストにおいてより多くの繰り返しが見られたのは、参加者が対面式に、より緊張を感じたためであり、対面式でのポーズの少なさは、インタビュアーからの相槌が発話の進行を促進した結果であると考察している。正確さに有意差がなかったのは、正確さが受験者にとって一番重要な評価要素であることに、また、複雑さに差

がなかったのは、受験者がテスト状況において普段言えないことに挑戦しなかったことに、それぞれ原因があるとしている。提示モードと受験者レベルの交互作用がなかったことについては、下位の受験者の能力が十分に低くなかった可能性があるとしている。

結論としては、パソコン式テストから対面式テストとほぼ同様のテスト結果を得ることができるが、受験者のパソコン式テストへの態度などを考慮すると、パソコン式テストが対面式テストに完全には取って代わることはできないとしている。

審査の概要及び評価

高い評価を与えられる点は以下の三点である。①これまでパソコン式スピーキング・テストの妥当性の検証を実証的に行った先行研究は少なく、学術的意義および独創性の高い研究である点。②研究方法論については、実証的データを量的に分析するだけでなく、質的な分析も行っており、多角的かつ具体的な分析・考察がなされている点。③記述については、十分かつ適切であり、先行研究の分析から結論に至るまで、正確な英語で首尾一貫した論理構成になっている点。

各審査委員より疑問もしくは批判として指摘のあった改善の余地のある点は以下の諸点に集約できる。①この研究では、対面式では妥当な、あるいはオーセンティックな結果が得られる（つまり本来望ましい）という前提に立って、パソコン式でも同様に妥当な結果が得られるかを見るという立場なのか、それとももう少しニュートラルにこれらが測る能力が同じかどうかを見るという立場なのかが明確に

なっていない点。②カウンターバランス法によるリサーチ・デザインを用いたが、練習効果ともとれる結果が出たためにとった結果の分析方法に対して、別の分析方法もあったのではないかという点。

だが、以上の2点は、むしろ本研究の今後の展開の可能性への期待の大きさから生じたものであり、論者の力量を高く評価するからこそ生じた指摘であることは言うまでもない。また、こうした疑問や批判点にたいする口述試問での応答は、指摘のあった諸点をすでに自覚していたと判断される適切なものであった。よって審査委員会は全員一致して冒頭に述べた結論に達した次第である。